

21 片側鼠径ヘルニアにおける腹腔鏡下対側検索の有用性について

木下 義晶・山崎 哲・金田 聡
飯沼 泰史・八木 実・窪田 正幸
新潟大学大学院小児外科

小児片側鼠径ヘルニア術後の対側発生率は10%程度とされ、患児のQOLを大きく低下させている。我々は2002年3月より腹腔鏡による対側腹膜鞘状突起開存の検索を導入し、現在男児15例、女児14例に施行した。陽性率は男児で3例(20.0%)、女児で5例(35.7%)、合計27例中8例(27.5%)であった。深鼠径輪の性状は症例により異なり、半月状ヒダにより視野が妨げられる場合、ゾンデを用いて展開を行い、診断能の向上に努めた。対側手術所見では8例全例に腹膜鞘状突起の開存を認めた。

22 慢性肺動脈血栓塞栓症に対して血栓除去術が奏効した一例

番場 竹生・曾川 正和・島田 晃治
中山 卓・名村 理・林 純一
新潟大学大学院呼吸循環外科

症例は60歳女性。主訴は呼吸困難。閉塞性肥大型心筋症にて内科加療中であった。一ヶ月前から呼吸困難出現し、当院内科入院。肺血流シンチで両肺に多発性の肺梗塞を認め、胸部CTにて肺動脈主幹部から広範に血栓を認めたため、緊急手術施行した。手術は体外循環、心拍動下に肺動脈内の器質化した血栓を可及的に除去、末梢は内視鏡を用いて可能な限り血栓除去を行った。術後経過は良好で、肺動脈造影および胸部CTでは肺動脈の末梢も良好に造影された。右心カテでは肺動脈圧は術中54/23mmHgであったが、術後28/8mmHgと著明な改善を認めた。慢性の肺動脈血栓塞栓症に対して積極的に手術を施行し良好な結果を得たので報告する。

23 降下性壊死性縦隔炎治療中にサイトメガロウイルス感染症を併発した1症例

平原 浩幸・富樫 賢一・菅原 正明
小熊 文昭・佐藤 良智・宮村 治男
長岡赤十字病院心臓血管外科・呼吸器外科

症例は57歳女性で、急性喉頭蓋炎のため他院にて抗生剤の投与を受けていたが、呼吸不全となり、CT検査で頸部から上縦隔、右胸腔内に膿瘍を形成したため、当院に緊急搬送された。緊急手術を施行し頸部切開と右開胸で膿瘍ドレナージを施行し、人工呼吸管理となった。膿培養より*Streptococcus constellatus*, *Prevotella*を検出した為、IPM/CS, CLDMの点滴を行い一時炎症所見や呼吸不全改善したが第30病日より再び呼吸不全進行した。末梢血の染色でCMV抗原(pp65)陽性細胞が出現した為、デノシンの点滴を行ったところ炎症所見、呼吸不全改善し、人工呼吸器より離脱できた。重症感染症に併発したCMV感染症の1例を報告する。

24 上腸間膜動脈瘤に対しバイパス術を施行した一例

磯田 学・大関 一・中山 健司
田中 典生*・清野 康夫**
県立新発田病院心臓血管外科
同 外科*
同 放射線科**

症例は40歳男性。生来健康であったが、急激に発症した腹痛を主訴に当院を受診した。腹部血管雑音を聴取し、腹部CTおよび血管造影にて上腸間膜動脈根部に直径15mm大の不正形の動脈瘤を認めた。血液検査等で感染性の所見は認めなかったが、上腸間膜仮性動脈瘤の診断で手術の方針とした。腹部正中切開で開腹し、上腸間膜動脈を根部で結紮し、動脈瘤を切除した後、大伏在静脈グラフトによる脾動脈と上腸間膜動脈とのバイパス術を施行した。切除標本で動脈瘤は解離性と診断された。術後の経過は良好であった。術後血管造影にてグラフト開存性は良好であった。上腸間膜動脈瘤の治療は結紮術のみで有効とする報告が